龍源寺報

82号

豪雪 被害報告

令和二年十二月の大雪は津南町各地で大なり小なり被害をもたらしたことは記憶に新しいですが当山も被害がありました。本堂裏の倒木により本堂屋根が破損、位牌堂裏の壁にも穴が空いてしまいました。二〇二三年の屋根普請の前での被害だったので不幸中の幸いとはいえますが、中の茅にも多少の被害が出た状況です。周りの山々も杉の木が中折れしているのが散見され、いかに重い雪であったかが想像されます。

地元檀信徒におかれましても被害のあったお宅があったかもわかりません。お見舞い申し上げます。

屋根の普請につきまして檀信徒の皆さまより大きなご協力をいただいております。感謝申し上げます。予定通り施工できるようにあと二年、ご寄付を分割でご協力いただいている方々には引き続きよろしくお願い申し上げます。

Instagramアカウント
@shinkenzan1582

七五三・村山家の皆様

坐禅

清浄鎮火祭

寺職 源住 龍副 の 隨筆

第６回

習慣が十割？

「習慣が十割」という書籍をたまたまインターネット上で見かけ、内容は読んでないのでわかりませんが、本当にその通りだなと思いました。

仏教における戒律の「戒」は本来、尸羅（シラ、シーラ）という言葉で「習慣」を意味する言葉だそうです。戒律というと禁止事項というイメージが一般にはあるかと思いますが、仏典に触れているとこれを「良き習慣」と捉えた方が納得のいくことが多いように思います。そもそも「中道」というお釈迦さまの両極端を否定する教えがある以上、「してはいけない」ということは極端なことではないだろうか、という疑問が私にはあります。ある老師は「することができない」なんだ、という言葉を残していますが、成る程、と思いました。ちなみに「律」とは僧団での決まり事ですので、私たち禅宗においてこれは「清規（しんぎ）」というものになります。でありますので戒律というと個人的なものと団体におけるものと二つの意味があるのです。

話は少し逸（そ）れましたが、この「習慣」というのがなかなかに難しいものです。私は三年半ほど本山僧堂と専門僧堂で修行致しましたが、坐禅を軸としてこの「調った習慣」を生きるのが修行であったなと感じます。大本山永平寺を開かれた道元禅師から脈々と続く禅の教えは、「調った生活習慣」を行じ続けることにもあるのではないか、そのようにこの書籍の題名から思いを巡らした次第です。生活が調った習慣に満たされていれば、自ずと心も調っていくものではないでしょうか。穏やかに安らかに平常心で、これが仏教的生き方ではないか、それには兎にも角にも調った生活習慣を目指したいところです。心を亡くすと書いて「忙しい」ですが、この「習慣」が崩れるからこそ「心を亡くす」のかな、とも蛇足ながら感じました。ただこれは本当に「言うは易し」の世界です。そして私たちは自身の習慣を生きながらも様々な御縁や運不運に左右されることがあることもまた心に留めておくべきでしょう。

編集発行　曹洞宗 深見山 龍源寺
〒949-8311 新潟県中魚沼郡津南町中深見乙1118番地　☎（025）765-3055
http://www.shinkenzan.com　Instagramアカウント @shinkenzan1582

龍源寺ホームページ　リニューアルしました！

この度、龍源寺のホームページをリニューアル致しました。遅ればせながらスマートフォンにも対応しました。内容も大幅に変わっております。より龍源寺のことを知っていただく内容になりました。ご確認ください。

https://shinkenzan.com

QRコードから→

言の葉敬策（ことのはけいさく）　第23回

赤口白舌尽消滅

「赤口白舌、尽く消滅す」と読む言葉です。大本山永平寺を開かれた道元禅師の師匠にあたる中国天童山景徳寺住職・如浄禅師の語録に触れていたら私の目に飛び込んできた言葉です（如浄禅師は消滅を消除としています。意味は同じでしょう）。赤い口に白い舌とは鬼を指すそうです。よって鬼を尽く消滅するという言葉で当時の中国では鬼門の方角にこの言葉を記したお札を貼ったそうです。如浄禅師が浄慈寺というお寺で住職をしていた頃の端午の上堂（正式な説法の場）のお言葉にみえます。

昨年は鬼滅の刃というマンガ、アニメが爆発的なヒットとなりました。内容を知らない方でもこのマンガの存在はほとんどの方が知っているのではないでしょうか。文字通り鬼を滅ぼすための戦いが繰り広げられるのですが、その鬼たちの名前が人類に脅威を与えた病気がモチーフとなっているようです。例を挙げると「黒死牟（こくしぼう）→黒死病（ペスト）」などですが、これら鬼滅の刃の鬼たちは新型コロナウイルス禍以前から登場していました。医療や科学の発展する以前、疫病や数々の病気は鬼など未知なる存在に例えられていたので、鬼滅の刃のヒットがコロナ禍の中に置いてというのに不思議な因縁を感じました。これは作者さんも含めて人間の計らいを超えたところで起きた現象だと感じます。

新型コロナウイルスは今でこそワクチンの存在や感染しないための対処法がわかってきていますが、そうでなかった頃の恐怖心を思えばまさしく未知なる鬼の如き存在であったと感じます。人によっては命が奪われてしまうのですから。如浄禅師は端午の節句にちなみ、鬼をも利用して禅の教えを敷衍しています。ちなみにみなさまご存知のように端午の節句に菖蒲湯に入る風習が日本には残っていますが、これも薬湯の意味合いがあり、その香湯で悪疫（悪鬼）を退散させる意味合いがあるようで、冬至の柚湯もこれに当たるようです。鬼の存在がちらちら感じられますね。

ある人がコロナ禍において、「いくら世の中が発展したとしても人間の心はこんなものなんだな」、と仰いました。コロナに右往左往する現代人をそのように見たのでしょう。無用な差別も生み出されました。人類はこれからも天変地異含めて「鬼」に悩まされることが多々あるでしょうが、その「鬼」を前にした時、その時の心の在り方を私も鬼滅の刃主人公、炭治郎くんを始め鬼殺隊の面々に見習いたいところでございます。思いは不滅、最後は「心の力」なのです。

参考文献・
風俗による如常禅師語録全評釈（大法輪閣）

四十九日・百日忌

納骨について

道元禅師
「正法眼蔵・道心」
にちなみ

土葬の名残であるのか、津南町では私が修行から帰ってきた十年くらい前は葬儀翌日の棚送り（自宅の霊壇を崩しお寺へ返却しに来寺し、お寺で初七日供養、住職と御斎）の後にすぐ納骨をする方が多かったようです。しかし、近年は一般的な四十九日納骨という方々がほとんどになってきています。納骨のタイミングは地方により様々で閻魔王の日に当たる三十五日での納骨など色々ですが、この妻有地方では四十九日納骨が一般的でしょう。龍源寺では葬儀で開蓮忌（最初の御供養）、棚送りで初願忌（初七日供養）、それから七日ずつの御供養は皆様それぞれにお勤めいただき、四十九日に合わせて百日忌を兼ねて法要を勤め、納骨の法要を勤めています。

葬儀翌日の棚送りで四十九日百日忌納骨の日取りを決めるのが一般的になってきています。特に四十九日に関してはインドより続く亡者にとって大切な法要と言われています。そして百日忌は卒哭忌とも言われ、書いて字の如く、遺族にとって大切な区切りとなる法要です。合わせて納骨ですので檀信徒におきましても意識を持っていただいて大切に勤めていただきたいところでございます。

ちなみに四十九日に関して大本山永平寺を開かれた道元禅師の主著「正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）」の道心の巻にてこのような言及があります。この中で頻発する「中有（ちゅうう）」というのが四十九日の期間に当たります。（中有は中陰とも言いますが、このあたりで「四十九イン」と言うのはこの中陰という言葉から来ているのでしょう）

「たとひこの生をすてて、いまだのちの生にうまれざらんそのあひだ、中有といふことあり。そのいのち七日なるそのあひだも、つねにこゝもやまず、三宝をとなえたてまつらんとおもふべし。七日をへぬれば、中有にて死して、また中有の身をうけて、七日あり。いかにひさしといへども、七日をばすぎず。このとき、なにことをみ、きくも、さはりなきこと天眼のごとし、かからんとき、心をはげまして三宝をとなへたてまつり、南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧と、となへたてまつらんことわすれず、ひまなくとなへたてまつるべし。すでに中有をすぎて、父母のほとりにちかづかんときも、あひかまひて正知ありて託胎せん。処胎蔵にありても、三宝をとなへたてまつるべし。」

日本人の死生観は古（いにしえ）より続く祖霊信仰（三十三回忌で弔い上げの済んだ死者は個性を失い、祖霊の一部となる）と大陸より伝わる輪廻観など豊かな死生観に彩られています。仏教における断見（死ねば全くの無になる）、常見（死んでも永久に個として存在し続ける）という二つの偏ったものは邪見であるという教えの影響も受けながら現在の形が作られていると考えられます。そもそもこの「私」を一つの「個」としてみるのがおかしいということでしょう。お釈迦さまは「無記（むき）」という立場であったともいわれます。

いずれにしても亡くなった身内が自身の内面での「死者」として立ち上がってくるのが供養とも言えます。死者との豊かな関係性を築くことで私たちがより深く豊かな人生を歩むことにつながるのではないか、供養をつとめる檀信徒に触れていると感じるところでございます。

参考文献・本山版訂補正法眼蔵（大法輪閣）